

◎価値対象性 p89 …「感覚的な粗雑な対象性」(自然的な性質)との対概念で「価値対象性」の言葉を使っている。

・対象① はたらきかけの目標や目的とするもの。めあて。

②〔哲〕英 object; ドイツ Gegenstand〕意識・感覚・行動などの作用が向かうもの。主体の作用に対してその目標や相関者となる実在。客体(客観)とほぼ同義。

◎マダム・クイックリ… p89

・「商品の価値対象性は、どうにもつかまえようのわからないしろものだということによって、マダム・クイックリ(注)とは違っている。」『資本論』

(注) シェークスピア『ヘンリー四世』、第一部、第三幕、第三場。

・数十年来、「気まぐれ」という意味で理解していましたが…

・マルクスがマダム・クイックリー(Mistress Quickly)に触れたのは深い意味があったとは思いません。商品の価値には、我々が生身の商品に触れて感じる価値とはまったく違い、そこには関係性、社会関係などアンリアルなものが本当は含まれているのだ。この捉えどころの無い、インタンジブル(〔無形の、実体のないなどの意〕人材や技術、ブランドなどの無形資産)さをちょうど「フォルスタッフにカワウソと揶揄されたクイックリー女将」に例えたのです。

◎B・フランクリン p95 …ジャーナリスト、発明家、国士、外交官をかねたアメリカの多才人にして建国の父ベンジャミン・フランクリンは、有名すぎて紹介するまでもない。1746～47年電気の研究を行い、雷が電気現象であることを証明し、49年避雷針を考案。

かれの経済学に対する貢献は、あまり有名じゃない。フランクリンは特に二つの点でアメリカの状況を気にしていた——特にイギリス重商主義政策の影響、そして豊富な土地と労働力不足がアメリカの経済発展に与える影響だ。フランクリンはウィリアム・ペティの特に人口に関する議論に大きな影響を受け、価値の適切な尺度は黄金じゃなくて労働なんだと考えた(このためフランクリンは、マルクスに絶賛された)。フランクリンは商業を「戦争」と見なすところまでくると、重商主義者から離れる。重農主義と似た形で、フランクリン(1769)は土地と農業が国富を増す「自然な」方法だと考えた。

◎笹縁 p97 …《「ささへり」とも》衣服の縁、袋物やござなどのへりを、補強や装飾の目的で、布や扁平な組紐で細くふちどったもの。

◎キリスト者の羊的性質が、その神の子羊との同一性…「神の子羊」は、イエス・キリストのことを指す表現のひとつ。

※中沢新一の「緑の資本論」から

「マルクスはここでとても皮肉で、ちょっとエロチックな表現をしている。都会出身の(たぶん!)上着のほうはとりすまして、きちんとボタンまで掛けたままあらわれたのに、その美しい姿に感動した田舎娘のように素朴なリンネルは、よく相手のことを知りもしないのにすぐに胸襟を開いて、上着のうちに「同族の美しい価値魂」を見てしまっている、と言うのである。ここで「具体化された価値」と訳されているのは、どうも「受肉した価値」という意味らしい。ということは、キリスト教的な表現をすれば、「子」であるイエスが、その身から神々しいばかりのオーラを発散させて、つまりは「聖霊」の息吹にみたされて、ガリラヤ地方の素朴な民衆の前に立ち現れた光景を踏まえながら、マルクスはこの表現をしていることになる。

上着は商品のオーラを身にまとって、「等価値」としてリンネルの前に立ち、うっとりした田舎娘リンネルはその魅惑的な姿の中に、素朴なリンネル族の「美しい価値魂」を発見して、二〇ヤールという数量をもって、自分の価値を「表現される」ことを欲したのである。凡庸な田園小説によくあるように、リンネルが自分の価値をよるこんで上着によって表現するのであり、上着のほうから進んで関係して与えた等式がこれではない、というわけだが、このことを知った他の村娘(他の商品)たちは、上着そのものがそれ自身でリンネルと交換しうる能力を、自然にそなえているように思いこむようになるだろう。上着はつぎつぎと他の村娘リンネルと関係を結んでいくようになる。これはまさに、いつでも商品を買うことのできる特殊な商品、つまり貨幣の萌芽を示している。上着はリンネルたちに対して貨幣のような地位にあるのだ。」

◎アンリ 4 世… p98 フランスのブルボン朝を開いた国王（在位 1589～1610）。ヴァロワ家との血縁のあるブルボン家のナヴァル王であり、王位継承権を持つ親王家の筆頭であった。しかし、母の影響でプロテスタント（フランスではユグノーと言われた）の信仰を持って育った。新旧両派の対立からついにユグノー戦争が起こると新教派の中心人物として人望を集めることとなった。

スペインが介入してきたため、アンリ 4 世は国家の統一を守るために改宗を決意、1593年にカトリックに入信した。その上でスペインと戦って破り、カトリック派も抵抗をやめてアンリ 4 世を国王と認めざるをえなくなった。1594年、アンリ 4 世はようやくパリに入城し、ノートルダム寺院で民衆から「国王万歳」の歓迎を受け、ようやく統一を回復した。

◎フィヒテ… 1762.- 1814。ドイツの哲学者。ドイツ観念論の代表者の一人。イマヌエル・カントの影響を強く受けた。自我を絶対的原理とする彼の知識学では、意識は事物 *Tatsache* ではなく、事行 *Tathandlung* であり、自由に自己自身を定立する自我は純粹活動であるとされた。

◎シェッフル…中世ドイツの単位。体積。9世紀以前。175リットル。 枘によって測った液体量

◎しとね【褥・茵】… 109p 敷物。座布団・敷き布団の類

◎重商主義（学派）… 112p 16世紀前半から18世紀前半にかけてヨーロッパ各国に支配的にみられた経済政策とそれを裏づけた理論。初期資本主義時代を代表する経済思想。輸出超過による金銀の流入が国富の増大のために不可欠であり、この結果を得るために貿易の統制が必要であるとする貿易差額説を理論的中核とする。国内市場より対外市場を優先した点に重商主義的特徴がある。

※フェリエ、ガニイ、バステリア、マクラウドなどは不明

【参考】◎貨幣の起源論…中野

①主流派経済学の貨幣観はその開祖たるアダム・スミス以来、金属主義の立場に立ち、物々交換の困難から貨幣が発生する起源を説明してきた。この金属主義に対立する学説が表券主義であるが、貨幣の起源に関心を寄せる歴史学者や社会人類学者の多くは、表券主義の方に与した。それは、物々交換から貨幣が発生したという歴史的事実を発見することができなかったからである。それどころか、歴史研究によれば、「計算貨幣」や「信用」といった社会制度は、商品交換や金属貨幣の登場よりもはるか昔の古代バビロニア時代以前の文明において、すでに存在していたことがあきらかとなっている。

金属主義によれば、貨幣の価値は、貴金属によって裏付けられているはずである。しかし、たとえばイギリスでは、17世紀後半、摩損によって重量を大きく減らした銀貨が流通していたが、物価・地金相場・為替相場にはまったく影響を与えなかった。また、イギリス政府は18世紀末から四半世紀の間、ポンドと金の兌換を停止していたが、ポンドが国際通貨としての地位を固めたのは、むしろこの時期であった。

経済とは、貨幣を中心とした社会現象である。経済というものは、貨幣の存在なくしては成り立たない。それにもかかわらず、主流派をなす新古典派の経済理論は貨幣の本質やその起源について、根本的に間違った理解をしている。

この金属主義と対立する学説は、通貨の価値の根拠は、その発行主体、とりわけ国家主権の権力にあるとみなす「表券主義(*cartalism*)」である。表券主義者は、貨幣の歴史的な進化や使用において中心的な役割を果たしてきたのは市場ではなく、国家であるとする。

(中略)

もっとも、主流派経済学も、不換紙幣の出現により、金属主義を見直さざるを得なくなってきており、今日では表券主義を支持するようになっている。この場合、主流派経済学は、国家権力によって強制通用力を与えられた「法貨(*fiat money*)」として表券貨幣を理解するのが一般的である。

(中略)

これに対して、L・ランダル・レイは、同じく表券主義に立脚しながら、国家が貨幣を租税の支払い手段と定めている点が決定的に重要であるという説を唱えている。彼の議論を要約すれば次のようになる。

レイは、貨幣とは負債であるという「信用貨幣論」と、貨幣の価値の源泉は国家権力にあるという「表券主義」を結合させたのである。このような貨幣論を「国定信用貨幣論」(*Credit and State Theories of Money*)と呼んでおこう。

②『古代には、お金はなかった。人々は物々交換でモノのやりとりをしていた。自分が作らない何かが必要なときには、それを持っていて、自分が作るモノと取り替えてもいいと言ってくれるだれかを見つけなければいけなかった。もちろん、物々交換という制度には問題があった。

とても効率が悪いのだ。自分が欲しいモノを持っていて、かつ、自分の持っているモノを欲しがっている人を見つけなければならない。しかも二人が同時にそう考えていなければならない。

やがて、あるモノを選んで「交換の手段」にするという考えが生まれた。理屈上は、支払手段として広く一般に受け入れられるものなら、何を選んでもよかった。しかし実際には、金と銀が選ばれることが多い。耐久性があり、加工しやすく、持ち運びもできて、希少だからだ。

いずれにしても、交換の手段として選ばれたものは、それが何であっても、それ自体が価値のあるものとして取引されるだけでなく、他のものを買ったり、将来のために富を蓄えたりすることに使えるようになった。要するに、このモノがお金であり、マネーはこのようにして生まれたのである。

これは明快で説得力のあるストーリーだ。そしてこれはマネーの本質と起源に関して古代から唱えられている由緒正しい学説なのである。』

『この説は明快で、直感的に理解できるかもしれない。だが、現代の標準的な貨幣論には欠陥がある。この学説は完全にまちがっているのだ。』

『研究者たちは物々交換で取引をしている社会を探したが、歴史上にも、同時代にも、そうした社会を見つけることができなかった。

アメリカの経済人類学者、ジョージ・ドルトン は 1982 年にこう書いている。

「物々交換から貨幣が生まれたという事例はもちろんのこと、純粋で単純な物々交換経済の事例さえ、どこにも記されていない。手に入れることができるすべての民族誌を見るかぎり、そうしたものはこれまでに一つもない」。

冒頭に引用したように、

「物々交換経済成立→ニューメール財（貨幣単位財）発生→貨幣経済発生（→信用（貸借関係）発生）」

という経路を辿った経済の存在は歴史上確認されていない。

歴史上に存在を確認出来るのは

「（信用（貸借関係）発生→）貨幣発生（計算貨幣発生）→経済発生」

という経路なのである。

・金属貨幣の流通価値が、その素材価値に依存するという「金属主義」という考えは、『金貨や銀貨は常に、それに含まれる金属の価値より高い価格で流通していた』という歴史的事実によって棄却される。

・もし金属に普遍的価値があるなら、そのまま”支出”すれば良いのであって、わざわざ鑄造して、なおかつ納税手段として指定するのは不自然。

・歴史的に見て、通貨の発行は戦争とリンクしている。これは、戦利品となって”余る”宝飾品を、租税貨幣として加工して軍人の給料とし、政府→軍人→民間業者（食べ物、酒。女を提供）→政府（現物の代わりに貨幣で納税）というサイクルを作るためだったのではないか。